た。それは、空間を薙いだように、横に突き出た松の木である。

あの日は寒い冬の朝で、墓所からこの広場へかかると、一面に堆積した落葉が、霜柱に押し上げられていた。二十歩も、三十歩も私たちはギシギシそれを踏みならして歩き、この大きな横松を見上げたのであった。

池には、岸から葭が生え、先になるところは水中に倒れ込んでいた。何とも荒れた感じであったが、自然のまゝこれ以上の美しさはないような気がした。あの瞬間、もの音のしないその場所が、昔のものに思われた。

いま小砂利を敷いたこの場所に立っていると、しきりに昔の、落葉の堆積したあの庭が懐かしい。また、身ぎれいにとり澄ましたオシドリが泳いでいる池を見ていると、あの倒れ込むように生い茂った葭がなつかしい。

しかしこれが公園というものであろう。もうお庭ではなくなった。お庭でなくなったから、圧巻の仰松庵は入口の柵に錠がかかってはいれない。茶室は使用願いでも出すことになっているのだろうか、以前のように茶室の前を通って、池の向う側の山へ廻りたいものだ。

少し疲れた。恰好の置座が据えてある。いろいろ言ったが、やっぱりここの空気はいい。空から吸いこんで、池の方へ吐く。そこに屑籠があって、ちゃんとスポンサーがついている。〈財産づくりは○○○○で〉

（商業デザイナー二科会員）

帳簿

福田重義

積雪一尺など、ついこの間までの寒さが、昨日今日は忘れたような暖かい日ざしを見せて、天草の島にも春がおとずれた。

やわらかい若草が、ちょっぴりのぞいている田舎道を、私は今日から開かれる定期の簿記講習会の準備にでかけていった。

思えば春秋三カ年、希望と夢を胸にいだいて戸惑いしながら走り廻ったのがまるで昨日のようだ。

私は道を急ぎながら、フッとあることを思い出していた。

まず組織づくりからはじめ、金融あっ旋、経理、経営、税務の相談指導など、広範囲にわたる指導事業に没頭していたあの頃……経験から得たのは、経営改善のポイントが「記帳」にあるということであった。

そこで、専属事務員を配置して「記帳」の〝事務代行〟をおこない、全然帳簿をつけていない者や、大学ノート式の記帳者も含めて、青色申告会を結成したのは二年前だった。

そうして、職員を総動員して事務代行をやっていたある日のこと……

こゝはある商店の事務室…

店主「私の店の売り上げは、年間いくらだったですかね。」

職員「ちょっとお待ち下さい。」と帳簿を調べていたが……

職員「三十六年度の総売上高は○○○○万円です。」

店主「では借入金はどうなっとりますか……実は金融公庫に申し込みたいと思っとるのですが……」

職員「三十五年度は○○万円で、三十六年度は○○○万円になっております。」

店主は興奮して

店主「そんなはずは無か。そりゃあ間違っとる！」とくってかゝる。

職員も少々ムッとした口ぶりで「そうおっしゃっても、銀行とも引き合わせずみで、間違いはありません。」

店主は帳簿を受け取りながら「商工会に事務代行ばしてもろうたばってん、何のうらみで私の店ば赤字にするのか……これぢゃあ金融公庫は金ば貸してくれん。」

私はそれを聞いてァ然とした。業者の実態をつかみ、指導する目的ではじめた事務代行と青色申告会のねらいは、完全にはずれていた。

事務代行することによって、業者はツンボ桟敷におかれ、その結果経営改善への努力を怠り、自分の売上げ高はもちろん、借入金さえ忘れてしまっている。

帳簿をつけることこそ、経営改善の源であるというのに、それが「税務」のため、「金融」のためだけを目的とし、「企業のため」の帳簿ではなくなってしまっているのだ。

私はあとで、その店主を訪ねた。

「さきほどは職員が失礼しました。どうでしたか。間違っていたのでしょうか。」

主人は頭をかいて「いや、どうも。やっぱり銀行に行ったら本当でした。どうして借入金がふえたのでしょうか。」と青い顔である。

シメタ、今度こそと心の中で叫んだ私は、用意していた二年分の試算表や精算書をひっぱり出して、今まで何度かやったであろう経営分析をして対策を説明した。

「根本原因はあなた自らが記帳しない〝緩慢経営〟にあるのです。今日からご自分で帳簿をつけて下さい。私もずっと見てあげますから、企業のための帳簿という考え方でやってみましょう。」と。

それから毎日、店主は熱心に帳簿と取り組んでいたが、次第に経営が好転していったのはもちろんである。

その後、強い反対を押しきって、事務代行を廃し、「自分の帳簿は自分で」「企業のための帳簿を」という二つのねらいで、個別指導や講習会、研究会等を通じて皆さんのお手伝いを続けている。

中小企業をとりまく条件は、良いことばかりではない。新しい時代におくれぬよう経営改善は急務である……

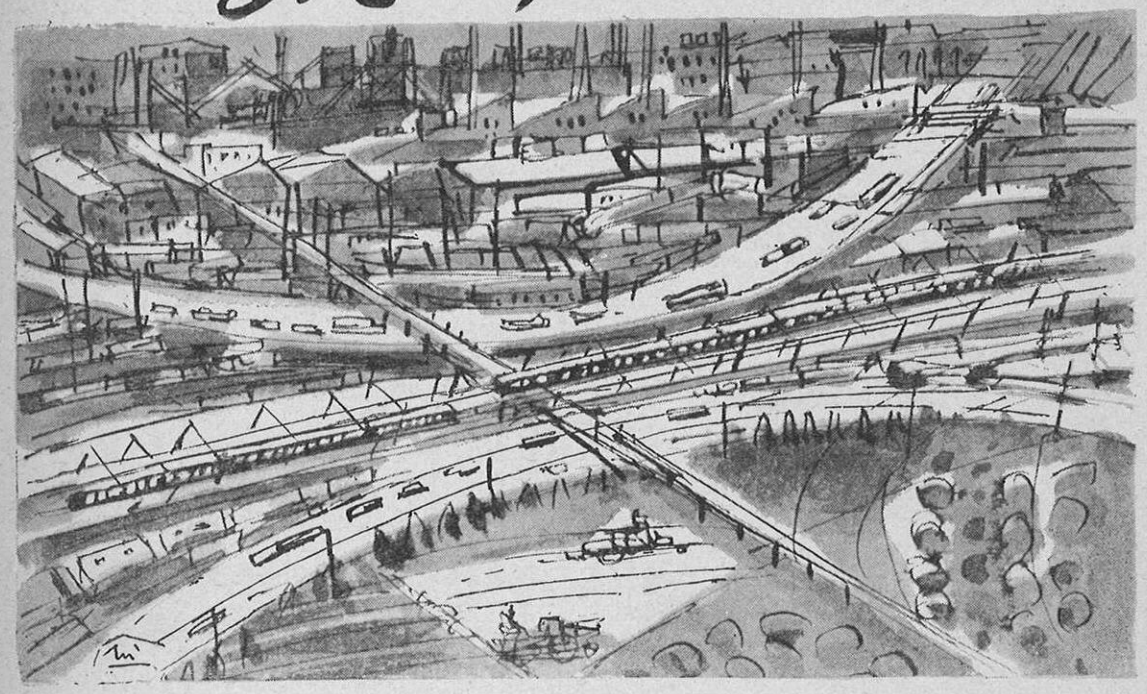
私は講習会場で待っている、その商店主をはじめ、いくつかの顔を想い浮かべながら、春の田舎道をいそいでいった。

（天草郡五和町商工会経営指導員）

特集

「新産業都市」指定をめざす

有明不知火地域



北は荒尾から、南は八代までを含む「有明不知火地域」は、新しい産業都市への可能性を秘め、国の「新産業都市」指定候補として、いま大きくクローズ・アップされている……

この「新産業都市」とは何か？……

「有明不知火地域」の輝かしい将来の構想はどうか？……

地域開発のニュー・フェイス

四大工業地帯にかわる「新産業都市」

問　この頃毎日のように「新産業都市」という言葉が、新聞やラジオ、テレビにあらわれ、熊本県でも、その指定を受けるよう、猛運動を始めたということが報道されていますが、この「新産業都市」というのは、一体どんなことですか。

答　文字どおり、新しい産業都市をつくろうということです。なぜ新しい産業都市をつくる必要が生じたかといえば、既成の工業地帯がゆき詰ったからです。

奇蹟といわれた西ドイツの経済成長をうわまわる、日本の経済成長の主役をつとめてきたのが、既成四大工業地帯（京浜、阪神、名古屋、北九州）の重化学工業です。

しかし、限られた区域だけに、極端に工場が集り、人が集ると、これらをいれるうつわである都市が混乱をきたします。そしていろんな問題